

第2回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 議事録

(1) 会次第等

令和3年度 第2回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議

会次第

日時：2021年11月2日（水） 14：00～ 16：00
場所：沖縄県市町村自治会館 2階 大会議室

1. 開会・あいさつ
2. 第1回会議の振り返り
3. 事務局報告
 - ・今年度の検討の進め方
 - ・本日よりご意見いただきたいテーマについて
 - ・検討テーマに関する事例提供について
4. 意見交換

検討テーマにそった意見交換

「新たな価値（魅力）の創出」、「伝統的価値の普及・啓発」、「人材育成」、
「継続させるための仕組みづくり」
5. 閉会・事務連絡

(2) 出席者

氏名	分野	職名等	出欠
波照間 永吉	文学	名桜大学大学院 国際文化研究科長 教授	○
山里 勝己	文学	名桜大学大学院 国際文化研究科 教授	○
大田 静男	歴史	八重山歴史・芸能研究家	○
上里 隆史	歴史	琉球歴史研究家	○
いのうえ ちず	文化	雑誌「モト」編集長	○
富田 めぐみ	伝統芸能	合同会社琉球芸能大使館 代表 舞台演出家	○
嘉数 道彦	伝統芸能	国立劇場おきなわ 芸術監督	欠席
小渡 晋治	伝統工芸	(株)okicom 常務取締役 琉球びんがた事業協同組合 特別顧問 「琉球びんがた普及伝承コンソーシアム」事務局長	○
久万田 晋	民族音楽/民俗芸能	沖縄県立芸術大学 芸術文化研究所長 教授	Web
知念 賢祐	空手	沖縄空手道古武道連盟ワールド王修会 会長	○

(3) 議事録詳細版

1. 開会・あいさつ

【事務局】

委員の皆様こんにちは。本日、司会を務めます沖縄県知事公室特命推進課 山城と申します。それでは、これより令和3年度第2回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議を開催いたします。

開会にあたり、島袋政策調整監よりあいさつがございます。島袋政策調整監よりよろしくお願いいたします。

【島袋政策調整監】

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました政策調整監の島袋と申します。よろしくお願いいたします。

本日はお忙しい中、「第2回 琉球文化ルネサンスに関する万国津梁会議」にご出席いただき誠にありがとうございます。9月8日に開催した第1回会議については、新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、皆様には一部 Web 形式による開催にご協力いただきました。今回は会場にお越しいただけるということで、大変嬉しく思っております。

さて、第1回目の会議におきましては、琉球文化における「多様性」、「国際性」、「新たな価値の創出」、「普及・啓発」の四つの視点から委員の皆様のご意見をいただき、それぞれにおける問題意識などについて共有させていただいたところです。本日は、前回の意見交換の内容を基に、「琉球文化ルネサンスの実現に向けた目指すべき姿」や「検討すべきテーマ」を事務局において整理しましたので、ご議論いただきますようお願いいたします。

今後につきましては、来年1月末頃までに中間報告の骨子案を作成し、第3回目の会議にて皆様のご意見を伺った上で、今年度末までには中間報告書を取りまとめる予定です。

委員の皆様におかれましては、琉球文化ルネサンスの推進に向け、忌憚のないご意見を賜りたいと存じますのでよろしくお願いいたします。

【事務局】

ありがとうございました。なお本日、久万田晋委員は Web による参加となります。また、嘉数道彦委員は業務の都合により欠席となっておりますことをご報告いたします。嘉数委員につきましては、第1回目会議と同様、後日、個別に会議の状況説明を行った上で、意見を伺う予定です。また、県の関係課として、沖縄県文化振興課、ものづくり振興課、空手振興課が Web 参加いたします。よろしくお願いいたします。

それでは、ここからは波照間委員長に進行をお願いしたいと思います。波照間委員長、よろしくお願いいたします。

2. 第1回会議の振り返り

【波照間委員長】

皆様こんにちは。先日の第1回会議におきましては、様々なご意見をいただきありがとうございました。本日も、活発なご議論をよろしくお願いいたします。それでは会次第に沿って、進行させていただきます。

まず、次第2の「第1回会議の振り返り」について事務局より説明をお願いします。

【事務局】

資料1 説明（省略）

【波照間委員長】

資料1の内容について、このような視点が必要ではないか、また、前回の会議で言い足りなかったことがあればお話しいただけませんか。

資料1や第1回会議の議事録を拝見してい

ると、第1回は総論的な議題のため全体的に抽象的な議論にならざるを得なかったと思います。本日、次回、そして次年度でここに提示されているような問題を具体的にどのような方法で解決していくかについて議論していくのだからと思います。総論としてすべきだということがあれば、ご意見いただきたいがいかかでしょうか。

取りまとめについて、異論がなければ次に移りたいと思います。

3. 事務局報告

【事務局】

資料2、3 説明（省略）

【波照間委員長】

事務局の説明内容に対して、皆様から意見や質問等ございませんでしょうか。四つのテーマである「新たな価値（魅力）の創出」、「伝統的価値の普及・啓発」、「人材育成」、「継続させるための仕組みづくり」を提示していただいておりますが、何か意見はありますか。

【山里委員】

この四つの検討テーマはその通りだと思います。それと同時に、これらは独立して議論するのではなく、やはり密接な関係を持っていますので、この四つは深いところでつながっているということを意識したうえで議論していくのがよいと思います。

【波照間委員長】

ありがとうございます。四つのテーマは互いに密接に絡み合っている。従って、個別に議論するのではなく、この四つが相互に有機的に関連しているということを念頭に議論していこうということだと思います。

私個人としては、「新たな価値の創出」、「伝

統的価値の普及・啓発」、「人材育成」、「継続させるための仕組みづくり」と、左から右に配列されていますが、この順番で議論をしようということではありません。実際、我々が一つの問題にぶつかって解決し、そして具体的に事を行っていくということであれば、まず伝統的価値を捉え、みつけて普及し増やす。これが最初にあるはずで、その次にこれを継続させるためにはどのような仕組みをつくれればいか。そのような議論をし、具体的にこのようにして人材を育成していく、そしてこのような育成された人たちの力で新たな価値をつくり出していく、という全体の流れがあると思います。そのため、山里委員からご提案がありましたように、左から右に流れていくようなことはまず考えないで結構です。我々は前回すでに現状や琉球文化は何かという議論はしていますので、前回の成果に乗っ取りながら、伝統的価値の普及・啓発、その仕組みづくりはどのようにするか、といったあたりからはじめていけばよろしいかと思えます。

4. 意見交換

【上里委員】

中城村のごさまる科について、事務局の方で実際に調べていただきありがとうございます。今の地元の歴史教育の状況がよく把握できていると思います。また、ほかの色々な参考資料も含めて調べていただきました。簡単な事実確認ですが、「しまかる」は情報ポータルサイトとして運営しているということですが、これは県の文化の情報発信のメインサイトとして考えていいのでしょうか。実際にサイトを拝見しましたが、事業の広報や色々な情報の発信サイトになっており、琉球文化を発信するというような印象は持ちませんでした。様々な沖縄文化の解説はありますが、それぞれが独立しており、伝統芸能や世

界遺産といった個別のテーマがどうやってつながって、沖縄の歴史の流れの中に位置付けられているかというのは、見ても分かりづらいと感じました。これで情報発信ということになると、やはり少し物足りないのではないかと思いましたので、質問です。

【事務局】

「しまかる」については、(公財) 沖縄県文化振興会の方で運営していると伺っております。所管課の文化振興課が諸事情により、本日の会議にまだ参加できていないので、現状や位置付けを改めて確認したうえで、次回報告させていただきたいと思います。ご指摘のとおり、実際、HP がどの程度アクティブに動いているかも含めて現状を報告させていただきたいと思います。

【上里委員】

ありがとうございます。それともう一点、しまくとうばの人材バンクに関連して、前回の会議後に事務局に人材の仲介サイトのようなものをつくったほうがよいのではないかという提言をしました。例えば、沖縄コンベンションビューローの「育人 (はぐんちゅ)」というサイトがあります。このサイトは、沖縄の歴史・文化に対する専門分野の人たちとか、観光、マナーなどの様々な分野の人たちが自分で登録をして、各企業から仕事を請け負って派遣されるというような仲介サイトです。このしまくとうばの人材バンクが今そのようになっているのか。メンバーを拝見すると、大学の先生はいらっしゃいましたが、実際にこれがボランティアになるのか、それともきちんと謝礼が発生するのか、そのあたりも含めて、ご存知な限りで教えていただけたらと思います。

【事務局】

しまくとうば普及センターも文化振興課で所管しているのですが、人材バンクに登録されている方は大学の先生の他に、しまくとうば養成講座の受講者等が登録されているということで伺っております。また、今のところは、講師派遣に関して謝礼金はないということですが、将来的にはそのあたりも検討していく必要があると伺っております。

【波照間委員長】

こちらは私の方で説明したいと思います。しまくとうば普及センターにある人材バンクは、基本的に無給です。ただ、しまくとうばといっても沖縄県内だと伊平屋、伊是名から与那国までですが、琉球語とした場合は奄美まで範囲に入ります。この膨大な琉球語について様々な質問が日本国内、アメリカ、フランスなどから入ってきます。しまくとうば普及センターのコーディネーターのみでは十分に返答することは難しく、外部からの質問事項について、専門的な立場からこたえていただけるような人材が必要です。そのため、大学の先生方をお願いしているというのが一つあります。そしてもう一つは各地域において、地域のしまくとうば保存・継承のための講座を開講しています。そのため、その地域の講座の先生方がいらっしゃるわけです。講座の先生もネットワークをつくらないといけないので、先生方を人材バンクに登録させていただいています。例えば小学校でしまくとうばクラブができたので、ぜひ自分たちの地域のしまくとうばについて教えてください、という場合には、人材バンクが紹介をして、学校側と直接交渉し、そこで謝金が発生する場合があります。そのような紹介業をするために人材バンクの登録をしているということです。

また、しまくとうば普及センターでは独自にしまくとうば講師養成講座を実施していま

す。沖縄本島中南部については昨年 36 名の講師を認定しました。この方々が地域や学校に行き子どもたち、あるいは地域の人たちにしまくとぅばを指導をするという体制を築いたところです。現在は国頭でこの講座の中級を開講しており、八重山では 9 月から初級を開講しています。

そのような形で講師を養成し、人材バンクに登録することで、様々なニーズにこたえられる体制をつくるのがこの人材バンクの考え方です。そのため、外国からの問い合わせに答える場合はボランティアです。他にもボランティアの場合もあるし、しかし、3～5 回の講座を小学校でしていただく時には一回、5000 円程の謝金が発生するようになっています。

【上里委員】

ありがとうございます。しまくとぅばの取組は非常に素晴らしく、しっかりと活動されていると私も思います。この質問をしたのは、継続的にこのような専門人材が生活できるようなサイクル、彼らが継続して取組ができるような体制を考えた時に、どうしてもボランティアになると実際にそれでは難しい若い人たちがいるわけです。歴史・文化をどのようにして現代に活かしていくかということであると、その歴史や芸能、様々な分野の文化に関わる人たちが、例えば企業からお仕事として請け負い、発展につながるようにすることだと私自身の経験からも思いました。人材バンクについて、実際にどのような内容で取り組んでいるのかを知りたかった次第です。ありがとうございます。

【波照間委員長】

この問題は文化の問題として重要だと思います。例えば、私たちしまくとぅば普及センターでは今、しまくとぅば検定を実施してい

ます。今年、4 年目で、今年度も 1,020 名強の方々が検定を受けます。現在は無料で検定を実施していますが、これが本当に順調に回っていくようになれば、いわゆる経済的な活動として、受験産業のようなものになると最高だと思います。英検等は受験料が発生しており、大きな産業になっています。しまくとぅば検定もゆくゆくはそのようなものにしていきたいと考えています。

沖縄市で行われているエイサー検定は検定料を徴収しているのでしょうか。どなたかご存知の方はいらっしゃいますか。

【久万田委員】

エイサー検定には問題の監修などで最初から関わっています。現在は（一社）沖縄市観光物産振興協会がおそらく実施しており、参加料は少額で徴収していると思いますが、あまり営利的な収益を上げているわけではなく、どのようにして収益性を上げるかは課題となっています。

尚副知事がおられた時に、沖縄全体の検定創設を目指したことがあったのですが、すぐに頓挫してしまいました。そういうものトリックして、沖縄の文化の様々な検定、例えばしまくとぅばであるとか、空手であるとか、エイサーに限らず、総合的に選んでできるような仕組みをつくっていかないと、長くは続かない可能性があるのではないかと少し懸念しています。

【波照間委員長】

どうもありがとうございます。エイサー検定の場合は少額ではあるけれども、検定料を受け取っているということですが、とてもじゃないけど、産業まではいきつかないということです。それでもやはり、話がありましたように、エイサー検定を受ける人が現実にいるわけです。また、ウェブでも受けられる

ようになっているそうです。そのため、世界中からエイサーを通じて沖縄の文化を知る人が毎年何名かいると思います。しまくとぅば検定もそうですが、歴史検定やグスク検定、世界遺産についての検定も日本全体で行われています。そういったことを行いながら、ゆくゆくは産業化を目標にするとしても、文化に対する知識や愛着を醸成するためにはよいツールなのだと考えています。

このあたり、みなさん他に何かございますか？

【小渡委員】

検定のイメージとして、その先がないと検定して自己満足で終わるとか、検定してもらったものの特に発表する場がないとか、もしくは検定だけたくさん持っているけど、なにも自分の仕事にいきっていない、検定を取得してその先に何かあるのか不明確である、ということがあります。例えば、沖縄の観光案内する人が、しまくとぅば検定などあらゆる検定を持っている場合は、一日5万円であるなど、観光、もしくはその地域のコミュニティなど、何かしらの出口と明確に結びつけていかないとなぜこの検定を取得するのかモチベーションがわからなくなるのではないのでしょうか。もちろんその文化が好きだから、愛着を育むためという理由もすごく大事だと思います。ではどのようにしてスケールアップ、定番化させていくかを考えたときに、検定を取得したときのメリットや活躍の仕方を示していくことが重要だと感じました。

【富田委員】

先ほどの検定の話でも、エイサーはエイサーで、しまくとぅばはしまくとぅばで行われているので、様々な分野でこのような試みがあると思います。しかし、意外と沖縄の文化に関わっていても違う分野の人たちがどのよ

うな活動をしているのかみえていない部分もあるのではないのでしょうか。上里委員のお話にもリンクするかと思いますが、情報発信するためにはプラットフォームが必要だと思います。もちろん外の方に、沖縄で、誰が、どのように文化を生み、継承し、今何が行われ、そしてこれから何が予定されているのか、まず知りたいと思います。様々な方法があると思いますが、やはり今の時代だときちんとした沖縄文化専門サイトを一つ、つくることが大切だと思います。どこかの業者に丸投げして、サイトをつくるということではなく、どのような情報を発信するのか、どのように情報を集めるのか、どのような分野の方々にこのサイトに掲載していただくのかまで、県民全体で議論をする必要があるのではないかと思います。

よく本屋さんでは、自分が読みたい本をすぐに探せます。さらには、新刊書とか今話題の本とか自分は知らないけれども、こういう本を読んでおきたいという棚もあると思います。沖縄文化専門のプラットフォームに英知や情報が集積され、的確に分類され、すぐに知りたいことが探せて、知らなかった新しい文化や、刺激的な試みにも出会い、自身の文化活動の力になる・・・そうした好循環を生む取組が必要ではないかなと思いました。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。これは行政としても当然、今後考えていく必要があることだと思います。このサイトを開けば琉球文化がみんなに伝わって、みられるということは当然目指さないといけないことだと思います。

また、小渡さんが話しておられた、検定をうけて自己満足で終わるのかと言われると、確かに検定を取得したからといってすぐに賃金を得ることにどうつながるかは簡単ではな

いと思います。私がギリシャに行ったときに、現地のツアーをビデオで映していたら、ガイドがこのツアーは私の著作権で、努力をし、観光ガイドの資格を得て、皆さんに話しているので流通するのは困ると言われたことがあります。このようにきちんとした資格を持って琉球文化を紹介しているガイドを養成することが可能になれば、小渡さんが話されたような琉球文化検定のようなものを通じて、グレード付けをして勉強することが、生活の築きにつながるということが可能になると思います。国家資格としてのガイドの問題を県独自で作ってみることがあってもいいと思います。そうするとしまくとうばも話せるし、グスク、信仰、民俗、芸能についても皆さんしっかり勉強してガイドをすることは非常に重要な試みになるのだらうと思います。

【山里委員】

この話に関連して付け加えますと、前回メイフラワー号の話をしました。プリマスの港に今もあり、1620年の人たちの恰好をして今もシェイクスピアの英語を話しています。この人たちの教育レベルがすごく高いのです。本当にスペシャリストです。ですから、ガイドもボランティアも大事なんだけど、最終的には委員長が言ったように、リスペクトされるような素晴らしい専門性を持った方々を、県が力を入れて育てていくと、さまざまな需要が出てくるのではないかと思います。

【大田委員】

しまくとうばの普及はいいことだと思います。先ほどから検定の話がでていますが、それ以前の問題としてもっと子どもたちに関心を持たせることが重要ではないでしょうか。石垣では「とうばら一ま大会」が約75年続いています。その「とうばら一ま」の作詞を募集しており、中学校の先生が夏休みの宿題と

していただいたのですが、石垣には沖縄本島や本土、宮古からの移住者がたくさんいます。では、そのしまくとうばを話せない子どもたちがどうしたかということ、自分の思っていることを標準語で書いてそれを近所のおばあさんにしまくとうばに直してもらって応募してできるようになりました。中学校の先生によって一生懸命取り組むところとそうでないところがありますが、自分達で関心があることを文章にして書くわけです。そのように関心を持たせると、標準語からしまくとうばに変えていくときの差に彼らは気づきはじめます。それがしまくとうばの普及に通じていけばと思います。

また、しまくとうばの日に、ある議員が質問時間を全部しまくとうばで行い、市長も標準語も混ぜながら一生懸命しまくとうばでこたえるということがありました。しかし、それを聞いていた他の議員はほぼ内容がわからなかったそうなので、議員にも率先して関心を持っていただきたいなと思います。ただ、しまくとうばの日を制定して終わりではなく、そういうところの普及も必要ではないかと思っています。

それから、八重山のしまくとうば講師養成講座は時間が足りないです。もう少し楽しみながらしまくとうばに関心を持たせたほうがよいのではないかと思います。

【波照間委員長】

最後の部分を補足しますと、しまくとうば普及センターが八重山語の初級講師の講座を行っています。沖縄本島は1週に2コマで、午前9時半から午後12時40分に終わります。ところが講師の先生方は那覇にいるため、八重山までの旅費をかけられない、時間を確保できないという状況です。これは全く経済の問題で、結局、離島苦なんです。講師も受講生もそれを味わわれているというのが現状で

す。できれば楽しい講座ができるように、肩の力が抜けるような講座にしたいと思っておりますが、そこはしばらく我慢していただかなくてはいけないだろうというふうに思います。

話題そのものが、伝統価値の普及・啓発に移りつつあると思いますが、実は昨日は11月1日で琉球歴史文化の日というのがスタートしました。沖縄タイムス、琉球新報ともに1面でとりあげられていたかと思っております。沖縄タイムスで取り上げられているのが、芸能、工芸、食文化となっていますが、これらは代表的なものということであり、これらに象徴される沖縄の文化全体が、この琉球歴史文化の日の材料であったり、我々が受け継ぐべきものだと思います。まだ第1回目ですから、どれほど浸透しているか、実は我々の今日の会議におけるテーマと全く同じだと思います。ただ、県として取組を始めていることは知っていてもよろしいことだろうと思っております。

さて、この伝統的価値の普及・啓発というところでオンラインの久万田委員、何かございますか？

【久万田委員】

伝統的価値の普及・啓発で一つ申し上げておきますが、資料3の2ページに「多良間村の八月踊り」がでており、「国指定重要民俗文化財」と書いておられますが、正しくは「国指定無形重要民俗文化財」です。文化財保護法で決まったものなので、事務局は訂正をお願いします。

国の政策で、重要な価値ある文化であるとして保護政策を取っていますが、では国が指定したもの以外は価値がないかというところ、決してそうではなくて別に指定されていようが、されていまいが沖縄の地域にとっては非常に重要なものには変わりません。だから、市町村が指定したものの中から、沖縄県がまた選別して、さらに国がやるというふうなピラミ

ッド構造になるのが本来ですけども、沖縄の場合は特殊事情で、1972年に本土復帰してから急に入ったので、ピラミッド構造になっていないのですが、我々の意識としては文化財に指定されているものだけを重視するという態度ではいけないと思っております。

一つ取組をご紹介しますと、沖縄県文化協会という団体がありまして、そこが「特選沖縄の伝統芸能」という舞台をこれまでに7回公演しています。去年はコロナでお休みでした。毎年五つか六つの団体を選別して主に国立劇場おきなわで上演しています。これは意外に皆さんご存知ないかもしれませんが、すべてYouTubeで見ることができます。そこでは文化財指定されている団体だけを重視するのではなくて、等しく沖縄の地域をまんべんなく見なきゃいけないということを常に強調しているところです。このYouTubeで紹介するというのは非常によい取組だと思います。先ほどのしまくとぅばの授業でも若い人も気軽にYouTubeで受講できるような仕組みを作ると、どこの離島に住んでいても参加できるのでとてもよいのではないかと思います。

もう一つは、富田委員の共通のプラットフォームという話に関連して、YouTubeで様々な部局が色々行っていますが、それを総合するところがないんですね。だから県民全体としては自分の知っているところしか知らなくて、先ほど波照間委員長がみせてくださった琉球歴史文化の日を取り上げた紙面でも色々な分野を網羅して、このようなものがYouTubeで見れるということをもっと総合的にとりあげ、構える必要があるんじゃないかと思います。先ほどの検定の話とも関わりますが、各部門で色々な努力があるんですけど、1から作るのではなくてそれを総合するというところ、これが琉球文化ルネサンスの取組では、すごく必要なことではないかと思っております。

【波照間委員長】

どうもありがとうございます。この伝統的価値の普及・啓発について、空手の問題もあるかと思えます。知念委員、何か空手についてこういうことが今話題になっているとか、こうすればもっと広がるとか、そういったことがございますか？

【知念委員】

今、空手の抱える問題としては、この小さい島に道場が 400 ぐらいあります。この 400 の道場がそれぞれ自立するというのは非常に難しいと思います。現在では、各道場に 10 名から 15 名の人数で、もちろん子どもをいれて発展している所もあります。それは、競技空手の発展を機会と捉えて道場を増やそうとしていると思うんですが、400 もある道場を活性化させて、それをもっと増やし、自立して、その経営主がそれで生活が成り立つということはほぼないと思います。道場を開くことによって、生活の保障があるか、また夢を持って描けるだけの将来があるかどうかとなると厳しいと思います。大体若いうちに、子どもの頃は沖縄の伝統文化だからやらせようと親も通わせますが、大体高校、大学そういう入試を控えて、結婚、そして家庭を持つようになるとこれでは食べていけない。そうなったときに親は果たしてそれを続けさせるかどうかとなると、モチベーションがないところに発展はないと思っています。では、どうすればいいかという、この国際化で外国人を沖縄空手の本場に呼んでそれを発展させるという掛け声がかかっています。それが、伝統文化である空手なのか、競技空手なのか。競技空手と伝統空手が一緒くたになっているところが結構あります。なかには、競技空手が進化したのが伝統空手であると思っている競技者もいます。そうすると沖縄空手の伝統文化はなくなります。競技空手と伝統空手では技

が違います。競技は内容の良し悪しにかかわらず勝たなくてはなりません。しかし、伝統空手は勝つようにはできていません。これは護身術からでているし、自分の内面を鍛える人間形成というのでうたわれています。そして、自分の身体を鍛え上げてそれを武器化するところまでもっていくのが伝統空手です。技も方向性も違う場合に伝統空手が、競技空手の流行に乗ってしまうと、結局文化がなくなります。そうすると、外国人が沖縄に来る意味はなくなります。競技空手は世界に広がっていますし、その技はみんな一緒です。世界大会で優勝したって、オリンピックで優勝したってどこにもそういう人はたくさんいます。プロとして活動している人がたくさんいる中で、沖縄はスポーツでもない、伝統でもないあやふやな態度で外国人に何を教えるんですか。それはもっと考える必要がありますし、足元をもっとみつめて、本当に外部に対応できる、外国人に教えられるようになる必要があります。もちろん技術がなくては、武術になりませんから、沖縄の昔からある空手を大事にしなが、普遍的で変えられない部分と、時代の変遷によっては変えていかなくてはならない部分は両方考えなくてはなりません。そのバランスはとっていく必要がありますが、危惧しているのは、伝統空手がスポーツ化することです。伝統空手が進化しているという競技者もいますが、実際は変化していてそれは退化だと思います。将来はどうなるかと考えると、原点に戻らしたいと思います。昔からある伝統ということであれば、それをきちんと進化させて世界で通用するような空手をつくり上げなくてはなりません。そのほうが外国人にも魅力があると思うし、時代の流れに身を任せるのではなくてもっと主体性をもって取り組んでいくべきだと思います。

【波照間委員長】

沖縄空手はもっと主体性を持って、スポーツ空手でもない伝統的な価値のある空手を目指すべきだという趣旨の発言ですね。どうもありがとうございました。

今まで普及や啓発というところに力点を置きながら、一部継続させるための仕組みづくり。そこまで話が及んできているかと思いません。いのうえ委員も首里での活動など色々なことをなさっています。この仕組みづくりに少し焦点をおいて、自分の経験などお話しただけませんか？

【いのうえ委員長】

首里の活動では昨年度に、首里まちづくり研究会というNPOですいまち検定というのを実施しました。やはり自主財源だけではできなくて、しまたて協会から助成金をいただいて、なんとか実現したという形です。これはすいまち塾で講座を受講した人が受けると受かりそうな内容という形で作りましたが、やはり維持していくためには受験料、それからその試験にパスするための教材費、講座の受講料など、県外の資格ビジネスの事例から学べることはたくさんあるなと思いました。

先ほどから出ている情報発信のプラットフォームという考え方について、これを沖縄県が行うことでいいのかという問題もあるかと思えます。例えば、今、CSR や社会貢献を一生懸命されている企業が多いので、民間企業の活力を活用するなど、連携しながら実施すると幅広いものになるのではないかと思います。

先ほどの首里の話に少し戻りますが、オリオンビールさんが今月10月末に3種類のビールを発売しました。一つは「首里ビール」として缶ビールで売っています。もう一つはクラフトビールで少量生産なのですが、「首里1427」というネーミングで、限定生産で売り

出されています。1427 というと、「安国山樹華木之記碑」が建てられた年号ですが、でここに首里のまちの原点がある、という話をオリオンビールと首里まちづくり研究会の連携の会議の場で結構語りました。尚巴志築城の思想も語りましたが、それがオリオンのビールを実際に開発する方にとってもイメージが伝わったようで、尚巴志が思い描いたであろう諸国の珍しい花や木を植えて、うまんちゅのための龍潭をつくってというような発想が響いたみたいで、すごく香り豊かなビールをつくっていただきました。民間企業との連携が進んでいくと、こういう商品開発に役立ったり、各企業の社員教育にも役立ちます。そうすると、子育て世代やお孫さんがいらっしゃる世代、幅広い世代の社会人への啓発にもつながります。更に、その子や孫にもつながります。子どもへの啓発は、つい教育機関という頭で考えてしまいがちなのですが、そうではない切り口からの啓発もあり得ると思います。

もう一つ、海外の事例から学ぶこともできると思います。琉球文化ルネサンスで、最初に思い浮かんだのはハワイの事例です。ハワイもハワイ語が危機にあったのを今復活させています。また、海洋文化が危機にあったのをホクレア号という船を復元し、航海法を復元することで、我々は海の民であるという、アイデンティティがまさにルネサンスになっています。ハワイの事例として、ハワイ語で授業を全部教える私立のプライベートスクールがあります。それからハワイ語でフラを教える。そうすると、英語で教えるのとハワイ語で教えるのとでは全く言葉が違うため、ハワイ語でしか伝わらない情感があります。それから観光客がよく乗るワイキキを走っている「the bus」という循環バスがあり、そのアナウンスでは地名をハワイ語のきちんとした発音で発音するということがされています。琉球諸語は50音で表現できないことがたくさ

んあると思いますが、例えば、公共の乗り物の放送やラジオ放送など、色々な場面で触れる機会が増えてくるといいなと思います。

ハワイ語の歌も、もちろん沢山作られていますし、すごい規模のハワイ語のデータベースも作られています。また、復元された船「ホクレア号」は様々な学校をまわって子ども達に海洋文化の教育をしています。これは海洋文化だけでなく、環境問題にもリンクさせて教育をしています。例えば、珊瑚が生み出す酸素は、地球の酸素の 1/3 ぐらいは海でつくられている、というような話をしながら、環境問題と自分たちの文化のルーツを同時に教育できるプログラムを展開しています。こういったところから、何かノウハウのようなものを私たちは学べるんじゃないかなと思っています。

琉球舞踊については県立芸大で、比嘉いずみ先生や宮城幸子先生が、うちなーぐちで教える琉球舞踊というのをすでに学生達に教えており、その授業を見学した際にとっても感動しました。足を運ぶ時に、砂の中に足を入れて、足の甲の上に砂がのった砂をさっと払うように歩んで行きなさいと教えられたんですね。これをきれいなうちなーぐちで聞くと、とても情感があり、情感が伝わる言葉を使うとこんなに響き方が違うんだというのはとても感動しました。空手もおそらくうちなーぐちで教えるのと、ほかの言語で教えるのでは全くみえる世界が違うんだらうというふうに思います。そのようなことから色々なノウハウを学べることもあるのではないかと思います。

【大田委員】

石垣では約 20 年前に観光ビジネス専門学校ができていました。そこでは、海洋、観光、自然や動植物について教えていましたが、個人が経営していたので 2、3 年で閉鎖してい

ました。これは先駆的なことをしていたのではないかと思います。というのも、以前に県立芸大の分校を石垣にできないか、という話をしました。結局それはできないという話になりましたが、ぜひ石垣に芸大とは違った大学を作っていただきたいと思っています。例えば、琉球王朝の琉球古典音楽と違った八重山の民族音楽は、台湾先住民の音楽とやや似ているものがあります。さらに、風土的にも生活習慣的にみても、似ているものが太平洋の島々にあります。そのような島々の歴史や文化と、八重山、宮古の文化を位置づけることができれば、一つの大学ができるのではないかと考えています。そのようなことをしないと、琉球王朝文化の組踊や、古典音楽、琉球古典舞踊にみんな収束されてしまうのではないかと危惧しています。そのためにも、芸大の分校ができなければ、違う形の専門学校でも何かできればいいなと思います。

また、八重山では音楽創造都市石垣推進市民協議会というのができ、芸能文化やアーティストのアーカイブ化を目指して、さらには公共施設、ライブハウス、民謡酒場での公演などを内外に向けてウェブサイトで発信をしています。現在登録しているのは 2021 年 10 月 26 日現在で動画 5 本、それから民謡酒場、ライブハウスなどは約 30 店舗。そして音楽は、「音楽民族」というサイトへの登録者は民謡が約 40 名、ポップスが約 70 名、バンド・その他が約 30 名で、140 名の登録がされており、ウェブサイトでも見ることができ、そこで色々な発信をしています。

人材育成についてはそんなに難しくは考えていません。中学、高校の郷土芸能クラブ、青年会、そしてそれが地域の祭祀芸能へという一連の流れが今のところはスムーズにつながっていると思います。

最後に、まだ話題にでてきていませんが工芸につきまして、八重山上布は今大変な危機

にあります。八重山上布を織る人、苧麻を栽培する人はいますが、紡ぐ人がいなくなってきました。そのため、機織りをする人が夜なべをして紡ぐ状況になっています。紡ぐ人を育成する養成講座も実施されていますが、なかなか定着していないのが現状です。今後先細りにしないためにはどうしていくべきか考えていく必要があると思います。

また、琉球料理に関しては、王朝料理と庶民料理があまりにも乖離しています。庶民の食文化をどのようにしていかしていくかも考える必要があると思います。

【波照間委員長】

ありがとうございます。先ほど、県立芸大の分校、あるいは専門学校という話題が出ました。決してこれは夢ではないと私は思っています。これについては、国の会議等にも出席されている山里委員に少しお話いただきたいと思います。

【山里委員】

私自身1970年代にハワイの大学に通っており、ハワイアンルネサンスの始まりを目撃し、体験しています。50年経って今の状況にいきついたというような感じがします。

内閣府の沖縄振興審議会に北部代表で出ました。八重山代表も宮古代表も出ていました。私はその時に、お金もいいんだけど、まずは人を育てるべきだと申し上げました。お金はなくなるが、人はなくなる、人材育成が大事である。戦後のハワイの沖縄系移民が、戦後の沖縄の復興は教育から始めるべきであるということで、琉球大学設立の運動をしたことと一緒にです。

ハワイにはハワイ大学システムがあり、4年制大学が三つあります。ホノルルに二つ、ヒロの一つですね。それから2年制のコミュニティカレッジが七つあります。カウアイ島、

マウイ島、ハワイ島、オアフ島に七つおいてあるわけです。沖縄とハワイを比べると人口も大きさも大体一緒です。内閣府の会議でハワイはできてなぜ沖縄ができないのか、ということを申し上げました。国立短大でもいい。その時に拍手したのが2人、八重山代表と宮古代表です。あとは反応がなかったんですよ。県がまずつくって、あと公立にするといいと思います。公立は総務省がお金を出しますので、最近設立しやすくなっていると思います。そうすると、若い人が全国からいっぱいきて盛り上がると思いますし、社会の活性化、それから伝統文化の普及ですね。それから教育の問題、人材養成の問題につながっていく非常に重要な話題ではないかなと思います。国と県と自治体が協力し実現したら、沖縄の大きな発展につながると思います。

【波照間委員長】

ありがとうございます。ただの絵空事、夢ではないという話だと思います。こういったことの実現の可能性を探っていく。これも私たちのこの会議の重要な仕事だと思っています。是非実現できるように、具体的な提言をできるようにしていきたいと思います。

人材育成、あるいは、新たな価値の創出、これらをどのようにして実現していくか。芸能の富田委員、そして工芸の小渡委員がいらっしゃいます。富田委員のほうから、人材育成や新しい価値の創出の問題について芸能からどう考えるかという話をさせていただきますか。

【富田委員】

当事者だけですべてのことをやっている、なかなか大変だと思います。いのうえ委員から、行政だけでもできないので民間企業の力をうまく活用して、という話もありましたが、例えば芸能公演では、県外公演や海外公演に

行くと1か月ほどの長い時間、会社を休んだりすることもあります。沖縄の舞台芸能に携わっている者が専門の人材は本当にごく一握りでほぼ兼業です。全員を専門のプロにすることはおそらく不可能なことだと思います。かつて玉城朝薫も王府に勤めながら組踊を作ったわけですから、生活基盤と文化活動のあり様も沖縄文化の一つかもしれません。理解のある民間企業・沖縄社会のもとで文化活動が成り立っていることを、視覚化できるようになるとよいと思います。例えば、文化に対する理解のある企業や、文化事業に対して支援をしてくださるような企業に、環境に優しい企業の認証マークのように、沖縄文化に対するサポート企業に対して感謝の気持ちを込めて何かできないかなという思いがあります。これは大企業に限らず、例えば一つの舞台公演でも、すごく厚いプログラムがあるのは、本当に小さなまちやぐわ一等でも広告を出してくださるからです。一つ例えば、ふるさと納税の文化納税版や、法人税の一部をこうした文化事業に対して軽減するというような具体的なメリットがあれば、もっと多くの企業が、積極的に文化事業に対して理解や支援をしてくださるのではないかと思います。

もう一つは今、先進国などがファッション的な感じでエキゾチックな他国の文化を盗用することが問題になっていますが、それは必ずしも他国だけではなくて、現代人の私たちが過去の先人たちが作った文化を搾取するみたいなこともあるのではないかと思います。沖縄の文化はとても美しく、素晴らしい色彩感覚やデザインが多くありますが、表層的なところだけ簡単に切り取られて、簡単にファッションとして消費されてしまう。すごく美しいからゆえに危険性を非常にはらんでいるなというふうなところがあります。冒頭に嘉数委員から例えば組踊にしても、その核になる部分の定義が難しいという話がありました。

定義できなくても、継承するときにそれを「モノ」としてだけ継承するのではなくて、どういう先人たちの思いが、この美しい琉球文化を生んだのかという「思い」を技術と一緒に継承をしていく。先人が文化を生み出した源流を追求し、「思い」も含めて継承していく、真摯な学びの姿勢があってはじめて、大胆なチャレンジや新しい文化を生み出すことができるんじゃないかなと思いました。

【小渡委員】

工芸の取組を一つご案内します。私が今着ているかりゆしウェア、これは紅型の古典柄で「青海波に帆掛け船」という図柄ですけれども、こちらは一般企業が関わりまして、サトウキビの搾りかすである「バガス」を和紙にして布を作っている生地です。それに沖縄の伝統の図柄をのせてこれを売るのはなく、シェアリングをする形で観光客や、MICEで来られるような企業の人達に展開をしています。最終的に回収をし、炭に変えて畑に戻すことによって循環する経済をつくりたいというのがあります。ヨーロッパなどでは一般的な発想ですが、循環型の経済をどうつくるかということ、工芸などを絡めながら実現しようとしています。この服にICタグを入れており、これをスキャンすることで、どこの工房の誰がどういう形でデザインした、という情報や、その工房のHPやECサイトにとべるとか、その職人さんがしゃべっている動画につながるなどが可能です。この服はデジタルプリントをしているので、本染めでの紅型ではないですが、これは仮に普及することによって紅型を知るきっかけになります。一般的に空港などで売られている500円の紅型のポーチと、僕らのプリントで何が違うかというのは、本当に情報をどう伝えていくかという部分に、すごく時間をかけて職人を巻き込んでいます。Google検索をすると、いくらで

も図柄が出てくるので、それを盗用し、中国で生産をし、安く売るといことが、まかり通ってしまっていますが、それはそれでビジネスである以上はなくすことはできないと思います。ではそれだけではなくて、ちゃんと沖縄の職人や工芸など伝承されてきたものが含まれている、伝えられるものが提供される状況をつくりたいといったような形で、かりゆしウェアやチョコレートのパッケージ、マンゴーのパッケージ、JTA 機内のヘッドレストカバーなど、工芸と企業を絡めたプロデュースを進めています。

その中で、職人でできること、できないことが当然あります。物をつくる、図案を考案する、実際に染めてみるとか、そういった常日頃からやってるものは問題ないですが、知財をどういうふうにするかとか、契約を交わしましょうとか、しっかりお金を取りましょうとか、ロイヤリティを払ってもらいましょうとかですね。あとはマーケティングや販路開拓ですね。一つの商品を作るにしてもかなり多くのプロセスがありますし、それをしっかりとトータル的にプロデュースしていく人間がいなくなかなか、色々人を巻き込んで作った物の在庫が積みあがってこれどうしようということになってしまうと、持続可能にはならないと思っています。そういったものを持続可能な形で、今は紅型からというふうに思っています。

もう一つご案内したいことが、先週フェイスブックが社名を「Meta」に変えました。これは「メタバース」からきており、「メタ」というのがギリシャ語で「超越する」という意味です。「バース」が universe、宇宙ですね。これらから作られている造語で、宇宙を越えていく世界という意味でメタバースという言葉があります。これはいわゆる仮想空間、仮想現実の中で自分を模したアバターがいて、地理的な距離とか関係なく、このような形で

会議ができたり、表情が分かるなど、メタバースの空間で様々なことが今後発生していくと言われており、片手で足りる年数ですごく進歩してくるかなと思っています。今、この琉球文化ルネサンスを検討している中で、今後の方向性として、このような仮想空間、仮想現実をどううまく活用していくか議論すべきだと思います。大学をつくることにしても、時間とお金がかかる土地の確保や、つくったあとには維持運営管理が発生してくる中で、逆にこの仮想空間でまずは物をつくり、人を集めることが可能になります。八重山や宮古に限らず、世界中から学生が来たりもするので、沖縄の届けたい文化や歴史を仮想空間、仮想現実を活用することで、世界中にほぼクオリティの差がなく届けることができます。このようなことを、今、我々はここで検討するのであれば、きちんと検討して適切な規制緩和や輸入措置をしていかないと、おそらく10年前に検討したものと同じ内容になると思います。近年目まぐるしく世の中が変わっていることを認識した上で取り組む、取り組まないことの検討をすべきだと思います。また、21世紀に作るルネサンスということで、息の長い取組にしていく必要があり、その中で人材育成や、継続のための仕組みづくり、新たな価値の創出にも関わってくることだと思います。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。話が前後してしまいましたが、11月1日が琉球歴史文化の日ということで、いわゆる歴史をどう伝えていくのかという事は非常に重要なことだと思います。この日だけが琉球の歴史文化に触れる日というわけではないはずだと思います。そのあたりから上里委員は、将来において琉球歴史の勉強が市民に血肉化する方策についてどのようなことが考えられるでしょう

か。

【上里委員】

昨日の琉球歴史文化の日記念式典では、基調講演をさせていただいて、沖縄の歴史の流れの解説の最後に今後どのようにして継承していくかのお話をさせていただきました。人材育成とそれをいかすための仕組みづくり、そしてやはり様々な分野の活用というところまで視野に入れていく必要があるのかなと思いました。それに関連して、先ほどの小渡委員のお話は僕も大賛成で、今後 20 年、30 年後の沖縄や世界の状況を見据えた上で、どのようにして文化を伝え、活用しているか、という部分がないといけないのかなと思います。私自身が携わっているデジタルコンテンツなどコンテンツ産業のなかで、沖縄の歴史、文化を、経済の中で、活かしていける方策があるのではないかと考えています。色々とはありますが、2年前に今帰仁グスクのVR、ARを製作し、5Gを使って遠隔授業と観光分野に活かす取組をしました。また、浦添市ではアニメを製作し、YouTube上でそれを流すことで、観光誘客と、浦添の歴史ブランドの確立に取り組みました。

今後、小渡委員がおっしゃるように仮想空間と現実の境目というのは限りなくなっていく社会になるのはほぼ間違いないと思います。さらに、ブレインテックという脳の操作を直接つなぐ技術はもう実用段階に入っている中で、仮想空間で大事になってくるのは、中身の話だと思います。そうなった時に沖縄の歴史や文化が活かせる場ができあがると思います。今までの様々な産業とは別に、新しい産業を見据えた上で、コンテンツの創出という観点から、今後の方針を考えていく必要があるような気がします。私の色々関わっている中では、やはり映像コンテンツ、なくなったものを再現する文化財 VR ですね。例え

ば、360°で映像を立体化して見れる技術があるので、それこそ踊りや空手の型がそこで保存できたり、それを見ることによって、地球の裏側からでも実際に学習ができるような、技術革新が起こっていると思います。その中で琉球の歴史は活かします。例えば映像に出てくる様々な風景、植生、着ているものや道具などは専門知識がないとつくりえないので、監修として専門人材を活かすことができます。そういう形で、専門人材がコンテンツの制作に関わることが現在見出している人材と文化の活用という形です。

【山里委員】

コロナのおかげで、大学はどうあるべきかという問題に直面しました。授業はオンラインばかりで大学に通えないですが、対面で授業することにも意味があります。それと同時に、テクノロジーの発達で素晴らしいことができるようになりました。この二つをどう兼ね合わせていくかが、21世紀の半ばから後半に向けての大きな課題になってくるかと思います。

また、人材育成の事例に関して、前回上里委員から教育の問題が出されて、学校教育現場があんまり熱心じゃないという話を聞いたんですが、中城村ごさまる科の事例は素晴らしいです。中城村でこれができるのであれば、なぜほかのところではできないんだろうと思います。要するに沖縄全体は一つ、大きい琉球としてのくくりがありますが、同時に沖縄の中でもまた地域というのがあります。だから沖縄は、いわばひとつの大きいパズルなんです。地域が色鮮やかな色を持っていて、パズルのピースとして存在していて、それが組み合わせてできる。それが沖縄です。世界も同じです。中城村のような取組をしていると、世界に対して自分が誰であるか、ということをお話せるようになります。中城村のような取

組がなければ、世界に出たときに自分が誰かはわからないというようなことになってきます。私たちは琉球のこれまでの姿から解放されなければいけないし、また日本語という優勢な言葉とどう向き合うかという、大きな課題があると思います。それが沖縄の学校現場の大きな問題の一つだと思います。

もう一つだけ言うと、本当に私たちの文化の奥底にあるものは何かというと、琉球語という言葉なんです。そこに文化の泉、創造の泉があると思います。名桜大学では「琉球文学大系」としておもろから現代まで、石垣、宮古も含めた 35 巻の編集を 12 年かけて行います。こういうものが私たちの文化の基層にあるのではないかという感じがします。これは完成したら 100 年使えると思います。シェイクスピアを例にとると、イギリスでは彼が亡くなった直後からシェイクスピア全集が編集されました。そして研究の蓄積が行われるたびに改訂をしています。それがあったからこそ、「ウェストサイド・ストーリー」など、シェイクスピアからインスピレーションを受けた作品が世に多く出ることになりました。そういう意味で、やはり立派な基本的なものを準備しておけば、私たちはルネサンスというものを実現できるんじゃないかと思います。そしてそれを中城村のような形で学校教育に取り入れるなど、できるところから取り組んでいくと非常によい感じで広がるのではないかと思います。

【波照間委員長】

ありがとうございました。本日は「伝統的価値の普及・啓発」、「継続させるための仕組みづくり」、「人材育成」、「新たな価値・魅力の創出」という四つのテーマに即しながらお話をいただきました。非常にエキサイティングな話が聞けたと思います。私も大田委員と同じように石垣出身です。その立場から

しますと宮古、八重山にコミュニティカレッジでもつくり、そこで地域の文化について勉強し、さらには台湾やフィリピン、もっと南の島の文化ともつながれるような拠点があれば非常に大きな力になっていくだろうと思います。対面と新しい科学技術の結合によって、宮古、八重山の地域に一つの大学ができる可能性はあると思います、非常に心強く思いながら聞いておりました。

一方でこれも八重山の事例でしたが、八重山上布や宮古上布の織り手たちを基底で支えているのは苧麻を紡ぐ仕事です。私も、宮古ではおばあちゃん達にお願いしてやっていた苧麻を紡いで、納品してもらうことができなくなったと、優秀な織り手である新垣幸子さんという方からしきりに聞かされていました。ですから素晴らしい宮古上布、八重山上布も、もう最初の工程でできなくなりつつあるということです。これは結局、紡ぐ人たちが仕事としてできないからですね。紡ぐ人たちが時給 1,000 円、1,500 円で紡いでいくようになれば、復活する可能性があります。これはつまり、沖縄全体の工芸に関わる人たちの生活できる産業活動にしていく必要があるということです。これを沖縄県民、個人個人の努力で支えてくれというのはいくらなんでも酷だと思います。国家は今回コロナの最中に Go To キャンペーンなどの様々な経済的援助を出しながら経済活動を支援しようとしたのです。そのようなことが可能であれば、沖縄の伝統産業、伝統工芸品を沖縄県民が利用しようとする時に補助を出していけば、立派な琉球漆器でご飯が食べられたり、高いミンサーのネクタイもしめられます。1本1万円のミンサーの内、4,000 円は県が産業支援という形で支援してくれればそのようなことが可能になります。ともかく何らかの仕組み、仕掛けをしないと今のままでは悪くなる一方ですし、我々がこの沖縄の工芸品を

使って生活するということも夢のまた夢だと思えます。

そういう意味で目指すべき課題、解決すべき課題はたくさんあると思えます。ごさまる科が中城村にあるように、今帰仁村では北山の歴史を学ぶことがあってよいし、勝連には阿麻和利の現代版組踊がありますが、そのような形で地域ごとに広がっていくとよいと思えます。

なかなか時間が短く、肝に入るような議論ができていないところは残念ですが、これにつきましては、また次回以降で詰めていきたいと思えます。それでは、事務局よろしくお願いたします。

【事務局】

どうもありがとうございました。波照間委員長、委員の皆さんありがとうございました。また、今日は新しいテクノロジーの話や、企業とのコラボレーション、SDGsのような視点も色々いただきましたので、また事務局の方でまとめて参りたいと思えます。

事務連絡ですが、次回の万国津梁会議は年明けの1月末から2月上旬の開催を予定しております。また、詳細の日程につきましては後日、ご都合を確認して日程を確定していきたいと思えます。冒頭申し上げました通り、第3回の会議で、中間報告の骨子案を作成し、示したいと考えておりますので、またよろしくお願いたします。

事務局からの事務連絡は以上でございます。これをもちまして、令和3年の第2回琉球文化ルネサンスに関する万国津梁会議を終了させていただきます。本日は長時間にわたりありがとうございました。